

ルデレはラテン語で、遊ぶ、演奏する、語る、楽しむなどを意味することばです。
ギターを手に心を語り、クリエイティブに音楽表現を楽しむ、そんな想いが込められています。



ニューノーマルな 「演奏会」

第1回長崎ギター音楽院

ギター短歌・川柳コンテスト

大賞（各1作品）、優良賞（各1作品）
奨励賞（各3作品）

募集していましたギター短歌・川柳、合わせて60首近い応募をいただきました。皆様のギターに対する想いや、熱心な練習風景などが目に浮かんでくる作品、個性光る一句一句を楽しく読ませていただきました。（※音楽院勢は特に、字余りなど気にもとめない自由？な句が多かったです・・・）以下に、各部門5首ずつの院長選を掲載します。大いに悩みましたが、楽しく新奇な趣向の感じられる作品を中心に選ばせていただきました。音楽院ウェブサイトにも全応募作品が掲載されていますので、ぜひそちらもご覧ください。次回も、多数のご応募をお待ちしています！

短歌部門

大賞

楽譜見て たどたどしくも 爪弾けば いつしか聴いた メロディ新た（高石清）

優良賞

奔致に鳴る恋人（ひと）の心中探るがに 耳押あてて弾くロブレニヨ（平野宏）

奨励賞

作曲を すると思わず 音羅列 気付いて楽しく 聴く世界（佐藤純子）
かえる子 楽譜の 上で 背比べ どんな曲が できるのやら（浜口征洋）
おすたたくこするくすぐるかきあげる ほらほらギターのなんと豊穠（平野宏）

川柳部門

大賞

ああこれだ 講師が弾けば 解る曲（高石清）

優良賞

トレモロ「やなかってえ手えの震うたい（平野宏）

奨励賞

新曲が ふくらむ前に 寝てしまい（飲んべえ）
特技はと聞かれりゃギターと言いたい（平野宏）
普面台、見ないでひけば、ずれる音（岩永俊三）

以下、いろいろな意味（笑）での奨励賞です。

ギター弾く 時間も忘れ一日通す ああそれでいい（立山照寛）、腹減った ギター片手に カップ麺（高石清）、今日もまた 上達目指し 練習す されども遠く 高きギター道（T. N.）、コロナ禍に ギター爪弾く オンライン（谷口喜八郎）、どの音も 我奏すれば 絶不調（J. A.）、名月を 仰ぎ見つつもギター弾く かぐや姫さえ再び戻る（みね&しのぶ）、セレナーデ ちょっと弾けない 責めないで（チャリンコ好き一）

特集

山下光鶴 新院長にきく Part2

今回は新院長に、音楽の楽しさや音楽院での活動に寄せる思いなどについて聞いてみました。

聞き手 佐藤純子、池浦恒信

池浦：今後、長崎ギター音楽院の活動をどんなふうに展開していきたいと思っていますか？

山下：長崎ギター音楽院は、凄腕のギタリストを多数輩出してきたという点が注目されがちですが、音楽院の第1の役割は、アマチュアの音楽愛好者の活動の基盤となるということにあると思います。放課後や仕事終わり、週末など、空いた時間に行って一息ついて音楽を楽しめる場所、一緒にギターを弾ける仲間がいる場所、先ずはそうありたいですね。その中でそれぞれがいろいろな形で音楽を楽しむ。前院長の山下亨は、「各人が持っている音楽性を引き出す」という言葉で表現していますが、それはまさに各人が、「その人なりのアプローチとペース」で音楽の豊かさと、おもしろさを発見し、「音楽がともにある暮らし」を送っていく助力となるということだと思います。音楽は、友人同士で楽しむ遊びの一つであったり、切磋琢磨し合いながらアイデアと腕を磨く芸芸であったり、人の心に潤いを与える趣味であったり、あるいは「ポケ防止」のためと笑って言いながら楽しむ癒しであったりと、いろいろな形で人の人生に豊かさをもたらすと思います。音楽院を、そんないろいろな形の音楽の楽しみ方のある自由な場所として発展させていきたいですね。

池浦：音楽教室としての新生長崎ギター音楽院の特色というのは、どんなところにあるのでしょうか？

山下：音楽院での学びの一番の特色は、「クリエイティブ」ということにあります。今日、多くの音楽教育が楽譜からの演奏専門となっていますが、それでは音楽する楽しみは半分以下になるし、楽譜に記されている想いやストーリーも本当の意味ではわかりません。自ら作曲してみたり、アドリブの仕方を学んだり、楽典の使い方について理解することで、もっと自由に音楽を楽しめる。音楽院は、ただギターが弾けるようになるだけではなくて、おそらく誰もが一度は抱いたことのある、「自分の想いを歌にのせて表現してみたい」という願いが叶えられる場所でもあります。それは、演奏する曲のジャンルにも通じることで、よく「ポピュラーの曲はどうだ、クラシックの曲はこうあるべきだ」というようなことがいわれますが、曲の作り方やアレンジの仕方まで分かれば、「なるほど、この曲はこうなっているんだ。この曲とこの曲は実はこんなところでつながっているんだ。」というのが見えてきてジャンルを分け隔てることなく、最終的にはいろいろな方法の良さを発見しながら自分なりのバージョン、カバーで演奏を楽しむことができます。音楽院に集う人たちには、ぜひクリエイティブに、そして自由に音楽を学んで、自分のことも他人のことも楽しませることのできる音楽人になってほしいと思っています。

池浦：これからギター音楽を国内外に、長崎から発信していくのですね？

山下：はい、長崎から世界の音楽文化のあり方（ギター音楽に限らず）に新たな旋風を巻き起こしていきたいという思いがあります。社会構造やテクノロジーの変化などのいろいろな要因が重なった結果、今日の音楽文化は大きく豊かさを失っているのではないかと思います。例えば、先ほど話していた「クリエイティブ」ということについて言えば、実は作曲や即興ということが少なくなったのには産業革命が大きく関係しています。印刷技術とともに楽譜が普及したため自分で作るのをやめてしまったということですね。また、最近はデジタル技術の普及で場所を選らばずに音楽を再生できるよう



たので、曲を作るところか自分で演奏するということも減っているんですね。その他にも、グローバル化で全世界の音楽に手軽にアクセスできるようになるにつれて各地のフォルクローレが急速に失われるなどしています。こういった変化は、もちろんネガティブな側面ばかり持っているわけではありませんが、今日の音楽文化が活気を失っていることと深く関連しているのは確かだと思います。「本当に豊かな音楽体験とは何なのか」ということを常に考えながら、長崎で、新しい時代のクリエイティブで豊かな音楽文化のあり方のモデルとなるような活動を創っていききたいと思っています。

佐藤：現代の「クラシックギター」界はその発展の中で、結果的にはある意味閉鎖的なモデルとなっている気もしますが、これからは違う部分が魅力的に見えたり刺激を与えたりしていくのでしょうか？

山下：クラシック音楽は、有名な曲の楽譜を探して苦勞して弾くとか勉強することが現在では主流になっていますね。そういう中で、こう弾くのが正しいという話をしたり、または演奏の優劣をコンクールで競ったりするわけですが、そういう雰囲気から「クラシック」というのは閉鎖的なんだという印象を与えるんだと思います。それから、今日のクラシックの音楽家のほとんどが作曲もアドリブ演奏もできないということも、とても残念なことだと思います。自分で曲を作ってみたり、メロディをアレンジしてみたり、アドリブで演奏したりする楽しみは、もともとクラシック音楽の世界にも普通にあったわけですから、そこをしっかりと広めていきたいですね。音楽ってこんな風にクリエイティブに楽しめるんだという発見とオリジナリティのある表現が、これからの魅力、刺激となっていくと思います。

佐藤：これから、以前のように子供がたくさんギターを弾けるようになったら、将来が楽しみに感じます。英語の歌の弾き語りをしたりと国際的に、いろんな方向から勉強できるのも素敵ですね。

山下：音楽は、人の表現力や感性やコミュニケーション力を磨くだけでなく、人と共に楽しむもの、人と人をつなぐものですから、「ひきこもり」のように社会との接点が薄くなっている、あるいはAIの進歩が人の存在を脅かすのではないかなといういろいろな問題が表面化しつつあるこれからの社会で必ず大切な力になると思います。音楽院では、クリエイティブな音楽教育に加えて、音楽を通していろいろなことについて考えるという姿勢を大切にしたいと思っています。1つの歌、1つのメロディーの中には、本当にたくさんのストーリーが詰まっています。歌詞を辿っていけば、この歌はどんな歴史で生まれたのか、こんな祭りがあったのか、こんな人がいるのか、こんな国があるのかなどいろいろな発見があるし、音楽の力で外国の言葉や文化も断然身近に感じられるようになります。ぜひ多くの子供たちに音楽院にきてもらって、ギターの腕も磨きつつ、たくさんの発見をしながら楽しく音楽を学んでほしいですね。

奏法解説

ベネズエラン・ワルツ

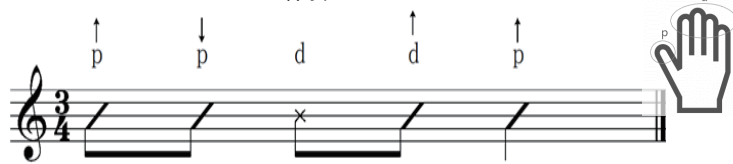
中世ドイツ・オーストリアの農村部で踊られていた踊りにルーツがあるという「ワルツ」。その親しみやすい3拍子のリズムはやがてウィーンを中心に各国へ伝播し、海を渡って「新大陸」へももたらされました。南米には、ワルツ本来のステップと、奴隷として連れて来られた黒人の人々が持っていたリズムセンスが融合して生まれたといわれている独特なワルツがいくつかあります。そのうちの1つ、ベネズエランワルツ（ベネズエラ風ワルツ）、音楽院でも密かなブームとなっています。

【ラテンアンサンブル】

ベネズエラの作曲家、アントニオ・ラウロの曲など、クラシックギタリストにもよく演奏されるベネズエランワルツですが、ラテンアンサンブルでは、アドリブやパーカッション奏法なども交えた、現地のフォルクローレに近い、より自由な形でのベネズエランワルツの演奏を楽しんでいます。アルパ（南米のハープ）やクアトロ（小型のギター）、マラカスなどの合奏で奏されることも多いベネズエランワルツ、メインの楽器ギターも、旋律パートや、和音パート、リズムパートなどに分かれて、ギターを叩くなどいろいろな奏法を駆使して活躍します。

以下、ベネズエラン・ワルツのコード伴奏の典型的なストロークパターンを掲載します。詳しくは、長崎ギター音楽院 YouTube チャンネルの「ベネズエランワルツのストローク」解説動画をご覧ください！

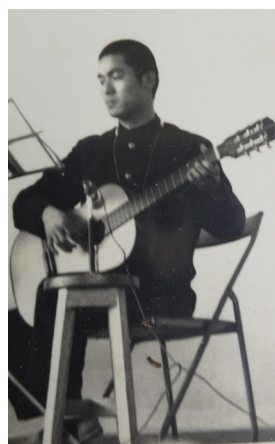
ベネズエランワルツのギター伴奏のストロークパターン



↑がダウンストローク（前向きに弾く）、↓がアップストローク（手前に弾き上げる）。
× 印：軽く握った形の手で軽く弦の上（サウンドホール付近）を叩き、「チャッ」という音を出します。× 音のあと、手は弦の上に置いたままにして、手を開くと同時に指のダウンストロークを行います。

寄稿「私とギター」

ギターサークルたんぽぽ、前田良平さん



私とギターの出会いは中学3年の時。義兄が古賀メロディーを弾いていたのを聴いてギターを好きになりました。その当時ギターを上手になりたいと思い長崎駅前ギター音楽院で山下亨先生の指導を受けることになりました。当時、生徒の皆さん方は上手な先輩ばかりだったので遅れをとらないようにと練習した記憶があります。また、自分の学校でギター同好会を作り、学校の送別会の時にギター演奏会を開きました（メンバー6人）。曲はラテンの曲だったと思います。今思えば懐かしく思います。音楽院での思い出は、計屋先生のラ・クンパルシータに合わせてタンゴを踊る伊藤さんや、同じ時期にギターを習っていた姉妹の方で山下先生のフラメンコギターに合わせてフラメンコを踊る姿を間近に見せてもらった記憶があります。今ではネット動画で見る事が出来ますが、その当時、本物の踊りを見せてもらったことは大変珍しいことでした。福岡での合同演奏会、長崎公会堂での演奏会、国際記念文化会館講堂での演奏会（ここでは初めて独奏を弾きました）など・・・その当時の記憶はまだまだ沢山あったと思いますが忘れてしまいました。音楽院で学んだことは大変楽しい思い出のひとつでした。ギター音楽院を辞める頃にはアルハンブラの思い出や、アラビア風奇想曲等、何とかやっとなんか弾けるようになりました。しかし、残念ながら20歳～65歳の社会人の頃は殆ど練習は出来ませんでした。

定年後近くのふれあいセンターでギターサークルたんぽぽのチラシを見て、定年後の暇つぶしと思い入会しました。入会してみたら凄腕の指導者でしたのでびっくり仰天。45年ぶりにギター奏でたら腕、指がまったく動かず若い頃のような演奏が出来ませんが、若い時に弾いた曲は若干記憶しているので再度頑張ってみようと思いました。たんぽぽでは、年4、5回の老人ホームなどのボランティア活動や年2回の発表会などがあり、充実感でいっぱいです。

たんぽぽに入会して一年後、突然脳梗塞を発症しました。その当時は音符をまともに追って読むことができず、また左手が麻痺し、特に薬指、小指などまったく自由に動かすことができなくなってギター生命も終わりかと思いましたが、そのことを脳神経外科の先生に話したら、「ギターと音楽は脳トレになるので元気なうちはいつまでも続けたほうがいいですよ」との事でしたのでその後もなんとかたんぽぽに通って今も頑張っています。去年長崎ギター音楽院の100回記念定期演奏会にも出席することもでき大変幸せを感じています。

音楽を楽しむことはボケ防止です。今はハビリと思って無理をせず、自分の動く指で、出来る限り長く、皆さんとお付き合いさせて頂き音楽を楽しみたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。

レッスncローズアップ ソルフェージュ・楽典レッスン

7月からスタートしたソルフェージュ・楽典レッスン、「ソルフェージュ・楽典」といっているが実際は次々と曲を作曲！実践を楽しみながら勉強しています。「作曲って、どこから始めたら良いのか分からない・・・」という人がほとんどだと思いますが、実は作曲の原理はとっても簡単！みなさん、新しいことをする楽しみとともに毎時間もくもくと音符を書いています。先月のレッスンでは、典型的なベネズエランワルツの和音進行に合わせたオリジナルのメロディー作りも行いました。

【作例紹介】

佐藤さん作のメロディーの冒頭部分



中越さん作のメロディーの冒頭部分



長崎ギター音楽院 YouTube チャンネル



長崎ギター音楽院 Youtube チャンネルでは、今回の録音会の演奏も含め、演奏動画や奏法解説動画など様々な動画を随時配信しています。是非チャンネル登録をお願いします。

コンサートレポート

第3回小さな音楽会「山下光鶴ギターコンサート」(9/27)を聴いて

彼がこの「小さな音楽会」を企画したのは、新型コロナウィルス対策と言うよりも、むしろ彼が学んでいたドイツでは、このような少人数を集めたこじんまりとした演奏会が小さなサロンや普通の家庭の広間でよく開かれるからだそう。大きなホールでのコンサートとは違って、より身近に音楽が感じられるのは間違いなさだろう。実際、演奏が始まると目と鼻の先でスポットライトに浮かび上がった光鶴氏が、まるで私一人の為にだけに演奏してくれているような錯覚を覚えるほどだった。

会場の小さなサロンの入り口に姿を現した光鶴氏。ギターを胸に抱き、軽く微笑んでいる表情には、緊張というよりもむしろ余裕が感じられる。一礼した後、椅子に腰を下ろすと、すぐに演奏を始めるのではなく、演奏前のコメントというのだろうか、ちょっとしたトークがある。このトークは挨拶やプログラム全体のことから始まり、次に演奏する曲の作曲者のことや作られた時代背景、曲にこめる自らの思い入れであったりする。光鶴氏のこの静かでソフトな語り口とよどみなく流れるようなトークは、聞く者を快くさせ、心を落ち着かせる魔力がある。しかし、その内容は音楽に対する十分な知識と共に、これまでの演奏経験に裏打ちされたしっかりとしたものであることがうかがえる。この語りはあたかも演奏の一部であるかのように一体化していて、演奏の邪魔になったり、違和感を与えたりすることがないのは光鶴氏のひとつの特別な「技」なのかも知れない。曲が始まるたびにこのような短いトークがあり、全部が終わってみると、ちょうど音楽に関する講義を知らず知らずの内に受けたかのような、そんな充実感を味わっている自分を発見する、それも素晴らしい生の演奏付きで。こんな贅沢なことがあるだろうか。

何はともあれ、演奏会のプログラムは「即興演奏」で始まった。即興ということだからその場の思いつきということなのだろうが、ギターを少しかじっただけの私としては、そんなことができるのだろうかと思ってしまう。前もって十分準備し、練習したものではないかと。しかし、実際はやはり即興で演奏しているそうである。日頃光鶴氏がいろいろな講座のとき、その場で簡単な曲を作って即興的に演奏したり、ひとつの曲をいとも簡単に(と見える)編曲できたりするのを知ると、やはり「即興演奏」に間違いのないといえる。それにしても即興で演奏できるとは「すごい」の一言である。

スペインの古楽「ロマネスカ」から始まり、バロックのJ.S. バッハへと続く前半のプログラム。音楽も時代とともに大きく変化してゆくのがわかる。光鶴氏のバッハ演奏を聴くたびに想うのは、その演奏技術の素晴らしさ、つまりミスのほとんど無い正確さ、指の運びの速さなどは言うまでもないが、私がいつも感じるのは、なんと表現すればいいのか、彼が演奏するバッハ音楽の自然さとも言うのだろうか、ぴったりする言葉が見つからないのだが、つまり、バッハが作った音楽というよりも、光鶴氏が創作した曲のひとつではないだろうか、と思わせるほど自然で違和感がない。確かに聞き覚えのあるバッハの名曲には違いないのだが、彼の演奏を間近に聴いていると、彼自身の身内から作り出され、血肉となって溢れ出ているかのように感じられてしかたがないのである。これは単なる私の錯覚なのだろうか。

後半のプログラムは、時代は近・現代へと進み、これも光鶴氏が常に重点を置いていっていると言ってもいいほどの、中南米音楽が続き、その間に光鶴氏自身のオリジナル曲も混じる構成になっている。

ヴィラ＝ロボスの2曲の間に、彼自身のオリジナル曲「夢見るように」が演奏された。プロコフィエフによる同名の曲からインスピレーションを得て作曲したとのこと、光鶴氏の曲を聴いて、それこそ夢見るような気分を十分味わわせてもらった。もう一つの自作曲「おようびと」は、彼自身の説明によると、萩原朔太郎の同名の詩から得た曲想に、アフリカ系キューバ音楽のリズムを取り入れた作品とのこと。朔太郎という、あの繊細すぎるほど繊細な感覚の持ち主だった詩人のことを思い浮かべると、キューバ音楽のリズムとどのように結びついたのか、どんなインスピレーションによって出来上がったのか不思議な思いがする。最後の2曲はエクアドルとパラグアイの曲で、二つとも「鳥」をテーマにしたものだった。エクアドルは赤道直下の国、そしてパラグアイはアルゼンチンの北隣に位置する海の無い国。遠く離れた二つの国の曲のあいだにどんな違いがあるのか、それとも共通点はあるのか、それらを聞き比べるのも楽しみの一つである。本来ならば、メロディーやリズム、ベース、打楽器などいくつかもパートに分かれて複数人で演奏されるものだろう。それを光鶴氏は一人で演奏する曲として編曲し、そのさまざまに変化するラスギアードのリズムの中に、ベースもメロディーもしっかり聞こえてくる。さすがに中南米の音楽を掘り下げて研究、演奏活動をしている光鶴氏の面目躍如という演奏だった。プログラム最後を締めくくった曲「鐘つき鳥」は終盤に向かって大きく盛り上がり、ラスギアードが激しくリズムを刻みつつ感動的に終わった。すべてのプログラムが終わり、深く一礼している間、少人数ながら来場者全員の大きな拍手は鳴り止まず、すばらしい演奏に対する感動と賞賛、感謝を表しているようだった。アンコールに応じて再び登場した姿に、拍手は一段と大きくなる。再び着席して演奏したのは「フロール・ウン・ディア(ある日の花)」というペルーの曲。それにもう一度アンコールに応じて最後の曲はJ.S. バッハの「アンダンテ」という緩やかな曲で終演となった。

演奏会が終わり、すでに暗くなった街のバス停までの道のりを歩きながら、今夜の演奏会を反芻するように振り返っていた。古いスペインの曲で始まり、バッハ、そしてヨーロッパから海を渡り、南米ブラジル、ベネズエラ、エクアドル、パラグアイと踊りのリズムが加わり、次第に激しくなるラスギアードと共に気持ちは高揚してゆく。そして、聴くものの心を強く揺さぶりながら、それが最高潮に達した時、突然のように音楽が終わる。

最後の音の余韻が消え去り、それでもまだ目を閉じ静止したままの演奏者。その沈黙の中で、再び音楽が逆流してゆくような、そんな不思議な数秒間を味わうことができたことなどを思い出しつつ、感動の余韻にひたっていた。夜の街をゆっくりと歩きつつ、バス停までの距離がもっと長ければいいのに、と思いつつながら。

(当コンサートレポートは、峰敏信さんに書いていただいたものを、紙面の都合上大幅に短縮して掲載してあります。ぜひ、音楽院ウェブサイト上に掲載してあるフルバージョンもお読みください。)



長崎ギター音楽院 録音・録画会レポート



去る10月3日(土)、愛の夢未来センター(雲仙市愛野町)にて、長崎ギターオーケストラと3つのギターアンサンブルがビデオ収録を行いました。コロナウィルスの影響で延期が続いている第102回定期演奏会の代わりとして観客なしの演奏会を行い、その様子をインターネット上に上げて全国へ発信しようという試みです。

観客のいない会場、録音機器やカメラに取り囲まれたいつものスタイルとはかなり違った演奏会に、これまでにない緊張がありました。演奏前の挨拶で光鶴先生は今日のイベントについての主旨や演奏に対する心構えなどを説明、ミスを怖れず、心をリラックスさせて、こんなふうに弾きたいという想いに集中すれば、素晴らしい作品ができるということを強調していました。

トップバッター、ジュビター・アンサンブル「アリア/J.S. バッハ」から、最後を締めたアフロディーテ・アンサンブルによるエクアドルの「光の天使」までクラシックとラテンの様々なレパートリーを演奏、それぞれが作曲したメロディーやオリジナルの装飾を施しての演奏が含まれた曲もありました。なかでも、ギターを叩くなどの趣向を凝らしたハチャトリアン「剣の舞」ギターオーケストラバージョンやペルー民謡「花祭り」の演奏などはなかなかの迫力で、文字通り会場を熱気に包みました。はじめての収録会ということで予定より大幅に時間が伸びましたが、終了後はメンバー一同、ひとつのイベントが終了した安堵感と、少しの反省を胸に秘めながら、それぞれの帰途につきました。次の演奏会はいっとすばらしいものにすぞ、という意気込みとともに。



〒850-0035
長崎県長崎市元船町7-4 松永産業ビル2階
Tel: 095-823-2766
<https://www.nagasaki-guitar-academy.com/>

長崎ギター音楽院会報誌 Ludere
発行日: 2020年11月1日
発行: 長崎ギター音楽院
STAFF
監修: 山下光鶴
編集長: 池浦恒信
編集・デザイン: 内村灯